

No.37

2011.2.28

いしかわ の遺跡

第12回 古代体験まつり



いにしえびと
「古人の遊びとまつり」をテーマに、第12回古代体験まつりを平成22年10月2・3日(土・日)の2日間にわたり開催しました。

初日は、土偶・土面コンテストやまいぶん遊びのクイズなどの15の古代体験、2日目には、独楽回しのイベントや昔の遊び体験に加えて、古代衣装試着、縄文かごづくり等の18の体験コーナーを設け、来場者に古代体験を楽しんでいただきました。



財団法人 石川県埋蔵文化財センター

Ishikawa Archaeological Foundation

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731
E-mail mail@ishikawa-maibun.or.jp
ホームページ <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

古代体験

古代体験まつり



土偶・土面コンテスト



収穫体験



独楽回し



縄文かごづくり



まつり庭の風景



石斧伐採体験



縄文弓矢体験



土器バスル



土玉づくり

古代体験学習講座 ～縄文土器づくり～



9月12日(日)に開催した「縄文土器づくり」は、今回も多くの方々に参加いただいた恒例の人気講座です。

講座では、県内で出土した縄文時代中頃の土器の中から、ダイナミックな文様のものや、他地域との交流がうかがえる土器、「太鼓」と言われている土器をモデルに製作しました。実物を見て、触れることで感じた縄文時代のワザところを、自分たちの土器に込めようと、熱いまなざしをそそいで製作した作品は、10月2日(土)の古代体験まつり初日に野焼きを行いました。自分たちの作品の近くにマキをくべると、炎によって作品の色合いが次第に変化していく様子に驚きつつ、徐々に焼き上がっていく様子をみなさん熱心に観察されていました。

9月12日(日)

縄文土器づくり



古代体験まつりで土器野焼き!



古代体験学習講座 ～須恵器づくり～

10月24日(日)に開催した「須恵器づくり」は、古墳時代中頃、様々な文化や技術とともに朝鮮半島から伝わった新しい焼き物「須恵器」を製作する、少し上級者向けの講座です。

ロクロを手で回しながら形を整えていき、現代のお茶碗のような形をした「杯」や「壺」などのほか、1,500～1,000年前の人々が作り出した“暮らし”や“まつり”の器を参考に、多くの作品を製作いただきました。この講座ではリピーターの方も多く、出土品と見間違えほどの出来映えの方や、高さ50cmもある大型の壺にチャレンジされた方もいらっしゃいました。作品は、センターの復元古窯で、11月19日から約75時間かけて焼き上げました。



窯の中の様子



熟練者は
さすがのお手並み

10月24日(日)

須恵器づくり

古代体験学習講座 ～縄文狩人体験～

12月5日(日)に開催した「縄文狩人体験」では、黒曜石で「矢じり」を作り、矢羽根を付けた竹の軸に差し込んで「矢」へと仕上げ、“狩り”(縄文弓矢の試射体験)を行い、石器づくりのワザや狩猟を生業とした縄文時代の暮らしを体験していただきました。

また、動物の骨や角を材料として、様々な道具を作りあげた縄文人の知恵にせまるべく、午後からは鹿の角を砥石などで削ってアクセサリーとし、編み紐と組み合わせて“首飾り”へと仕上げました。

「道具づくり」、「狩り」、「獲物の利用法」とおして、時代を越え、縄文狩人と出会い、自然や動物たちへの想いを共有できたのではないのでしょうか。



黒曜石の矢じりづくり



12月5日(日)

縄文狩人体験



鹿の角を使った
アクセサリーづくり

平成22年度
発掘調査から

横江D遺跡

白山市横江町地内に位置し、近くには横江荘遺跡(奈良・平安時代)や野々市町郷クボタ遺跡(弥生・平安・室町・江戸時代)など多くの遺跡が知られます。北陸新幹線の建設工事に伴い、野々市駅から約1km南西の在来線に沿った用地を発掘調査しました。調査の結果、弥生時代後期、平安時代末～室町時代のムラが確認されました。

弥生時代後期では、^{たてあな}竪穴建物(地面を掘りくぼめて床をつくった建物)が1棟と幅10m前後の川が3本見つかりました。川は洪水により、比較的短期間で埋まっていた。

平安時代末～室町時代では、^{ほったてばしら}掘立柱建物(地面に直接柱を埋め込む建物)や南北方向に延びる大きな溝(幅約4m)が見つかりました。また、深さが1mほどの深い方形の穴が見つかり、物を貯蔵した穴や、作業場ではないかと考えられます。この他、^{すずやき}珠洲焼・^{せい}青磁・^{はくじ}白磁などの陶磁器や、^{すずり}硯が出土しています。



調査風景



竪穴建物(弥生時代)の調査



打製石斧(弥生時代)の出土状況



方形の穴(平安時代末)の調査



掘立柱建物(平安時代末～室町時代)

小立野ユミノマチ遺跡

金沢市こだつの小立野5丁目地内に位置する石川県立金沢商業高等学校の改築工事に伴い同校のグラウンド内を発掘調査しました。

その結果、江戸時代の東西および南北方向に土地を区画する溝や塀、礎石を伴う建物、井戸、土坑、畠の耕作痕跡である畝溝うねみぞなどが見つかりました。調査区域の西側で確認された土地区画の一つは、東西辺約18m×南北辺約40mの長方形で、内側には井戸があり、建物などが存在した可能性が高いと思われます。溝による区画割り以前は塀などによるものであったとみられ、



調査箇所(北西から)

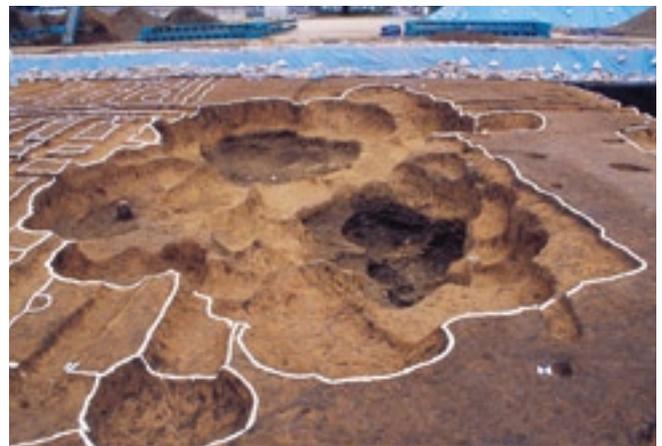
その外側(東側)には畠などの耕作地が広がっていた様子がありました。また、地面に大きく掘り込んだ穴(土坑)がたくさん見つかりました。その目的はまだよくわかりませんが、物を貯蔵するため、あるいは地山の粘土を建築等の材料に使うためなどが考えられ、深い穴には出入りのためにスロープや階段状のものを設けたものもみられます。

出土品では、江戸時代前期から幕末にかけてのひぜん肥前(現在の佐賀県と長崎県の一部)などで生産されたわん碗・さら皿・はち鉢などの陶磁器が多くみられたほか、とうみょう灯明にも用いられた土師器の皿や人物や動物などをかたどったつちにんぎょう土人形、暖房器具の行火などの石製品、どうせん銅銭(寛永通宝)やキセルの吸口などの金属製品、かんざしなどのガラス製品などがありました。

今回調査した箇所は江戸時代の絵図等によると、加賀藩の重臣横山家の下屋敷および弓などをあつかう足軽の屋敷が置かれていた場所に当たっています。調査で見つかった溝や塀は屋敷を区画するものと考えられます。



礎石を伴う建物(北西から)



大型の土坑(北から)

環日本海文化交流史調査研究集会

平成22年10月29日に環日本海文化交流史調査研究集会を開催しました。この調査研究集会は、平成12年度から毎年開催しており、今年度が11回目となります。今回のテーマは「近世日本海域の陶磁器流通—肥前陶磁から探る—」です。

研究集会では、17~18世紀の肥前陶磁の生産と日本海域での流通について報告討論を行いました。最初に生産地である肥前窯（佐賀県西部～長崎県東部）について、窯場が佐賀藩・大村藩・平戸藩の3藩にまたがることや、藩ごとに異なる製品の特徴やその時期的な移りかわりが紹介されました。次に消費地の事例報告に移り、日本海に沿って南から北へ、福岡県、山陰地方、福井県、石川県、富山県、新潟県、東北地方の順に発表されました。

福岡県では筑前・豊前などの旧国域ごとに様相が異なることや、陶磁器などを運んだ廻船について報告されました。山陰地方では石見銀山、松江城下町、米子城下町などにおける成果のほか、布志名焼・石見焼など、地元産の陶器について報告されました。

北陸地方では1669年の寛文の大火の後始末に伴う豊富な資料に恵まれた福井城跡を中心とした福井県下の状況に続き、石川県を金沢城下町と、それ以外の加賀・能登各地にわけた報告が行われました。金沢城下町の報告は広坂遺跡が中心で、1631年、1690年、1759年の大火を画期とする遺跡の変遷が、絵図と照合されつつ報告されました。加賀・能登各地については都市部と農村での出土割合の違いや、文献資料にみる港町の事例が報告されました。富山県では海運の一端を示す海揚がりの資料や越中瀬戸焼の生産についても報告されました。新潟県では県西部の状況、東北地方では久保田城下町や本荘城跡などの秋田県下の状況を中心に報告が行われました。

翌日の見学会では、石川県内の広坂遺跡、金沢城跡石川門土橋、同新丸、同本丸附段、同東の丸附段、同車橋門、兼六園江戸町遺跡、前田氏（長種系）屋敷跡、木ノ新保遺跡（以上金沢市）、谷内ブンガヤチ遺跡（中能登町）、八田中中村遺跡（白山市）、八幡遺跡（小松市）、九谷磁器窯跡（加賀市）

など13遺跡24地点出土の資料見学のあと、各地における肥前陶磁の出現時期について検討を行いました。

今回の研究集会・見学会は、県内出土の肥前陶器、肥前磁器を観察することができ、さらに肥前窯での生産開始時期と日本海側の消費地での肥前陶磁の出現時期を検討できる大変よい機会となりました。



発表の様子



見学会の様子



見学会での検討

収蔵品ギャラリー

当センターが保管している数多くの出土品の中から、選りすぐりの「収蔵品」をご紹介します。
今回のテーマは「近世陶磁器」です。

収蔵品No.23 九谷で焼かれた陶磁器

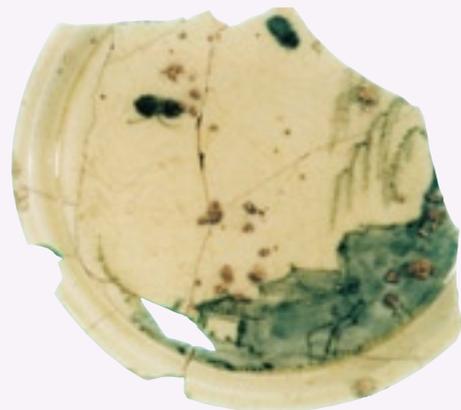
やきものは陶磁器と総称される場合がありますが、「陶器」と「磁器」には違いがあります。陶器は主に粘土を原料に作られ、素地には水を吸う性質があります。磁器は主に陶石という石を砕いたものを原料とし、硬くて緻密な素地は水を吸いません。

県内における磁器生産は、江戸時代前期の明暦年間(1655~58)に江沼郡九谷村(現在の加賀市山中温泉九谷町)に大聖寺藩によって窯が築かれ、開始されました。そのときの窯は国指定史跡「九谷磁器窯跡」として保存されています。

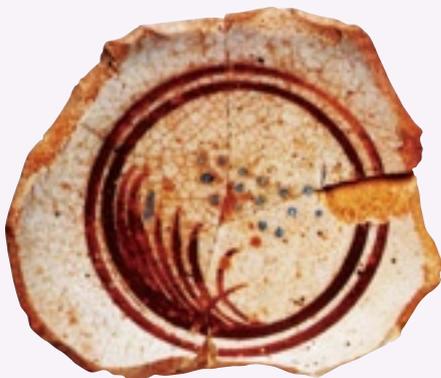
九谷では白磁・青磁のほか、白磁に青い線で文様を描いた「染付」、色絵磁器などが焼かれました。県内の磁器生産は江戸時代中ごろに一旦途絶えたのち、江戸後期に復活し、窯も南加賀一帯に広がります。この段階のものを「再興九谷」とよびます。



染付碗



染付皿



色絵磁器

(縮尺不同)

訪ねてみよう加賀・能登の遺跡

すえもりじょうあと 県指定史跡 末森城跡

宝達志水町ほうだつしみずちょうにある戦国時代の山城です。南北にのびる海岸砂丘に東から末森山が張り出して平野が狭まる、能登南部の交通の要所に築かれています。

城は標高138mの末森山の山頂を中心に築かれ、「ホンマル」、「ニノマル」、「サンノマル」、「ワカミヤマル」などと呼ばれる平坦地が尾根の上に連続して造り出され、空堀が設けられています。昭和60～63年に小規模な発掘調査が行われ、越前焼や碁石など、城内での生活を示す遺物とともに、合戦を物語る鉄砲玉も出土しました。

城の歴史では、天正12てんしょう (1584) 年の「末森合戦」が有名です。金沢城主前田利家の家臣、奥村永福おくむらながとみが守る末森城を富山城主佐々成政さつさなりまさが率いる軍勢が急襲しますが、金沢から利家の援軍が駆け付け、成政軍を撃退した戦いです。当時、豊臣秀吉と徳川家康が対立しており、利家は秀吉、成政は家康の陣営に属していました。

末森城跡は県内を代表する戦国時代の山城として、平成3年に県指定史跡になりました。



末森城跡全景



戦国時代の末森城(想像図)

所在地：羽咋郡宝達志水町南吉田、竹生野ほか
交通：JR七尾線宝達駅から車で5分
駐車場から山頂まで徒歩20分
お問い合わせ：宝達志水町教育委員会生涯学習課
電話 0767-29-8320